

通信制高等学校における生徒の課題と教員のかかわりについて

—在校生へのアンケート調査から—

小野秀之^{*1}・小林理^{*1}

A Study to Investigate the Needs of Students Attending Correspondence Education High Schools and the Relationships with Their Teachers — Results from a Questionnaire Survey to the Students —

Hideyuki ONO^{*1} and Osamu KOBAYASHI^{*1}

〈抄録〉

通信制高校は、主に勤労青少年を対象に始まったが、近年、通信制高校に通う生徒の中には、中学時代の不登校や高校中退を経験するなど多様な生徒が増加し、生徒のニーズも学校の役割も変化してきている。

本研究は、通信制高校の生徒を対象に、生徒の課題と教員のかかわりについて調査を行った。その結果、生徒が直面している課題は、通信制高校へ入学するまでの経緯と関係があることが明らかになった。中学校からの入学者には不登校を経験している者が多いが、高校入学後、働いている者は少ない。入学前に働いていた者には、家庭の経済状況に苦しさを感じ、入学後も働いている者が多いなどである。教員のかかわりでは、声掛けやアドバイスなど支持的なかかわりについては評価する生徒が多い反面、あいさつや授業態度などの指導が十分ではないと感じている生徒もいる。教員が支持的にかかわることは、生徒の登校継続と学習意欲を支える効果は期待されるが、通信制高校は教育指導の場でもあることから、生徒の社会性や学習態度を育てる教員のかかわりが今後の課題となると思われる。

これからより多様な背景を持つ生徒たちが通信制高校に入学して来ることが予測される。ソーシャルワークを視野に入れた個別的なかかわり、多職種連携のチームアプローチが必要となるだろう。

Key words：通信制高校、不登校、高校中退、教員のかかわり

I. はじめに

1. 通信制高校の役割

本研究の目的は、通信制高校の生徒の実態と教員のかかわりを生徒の視点から明らかにし、通信制高校の役割について考察することである。

通信制高校は、「通信制の課程」（学校教育法第4条平成23年6月3日法律第61号）に位置付けられ、大衆的、国民的な高校教育を目指し、青少年が職業に従事していても、地理的条件に恵まれなくても、高校生の年齢を過ぎたとしても、様々な理由で全日制高校に進学できない者に対し、平等教育の見地から高校教育が受けられる

機会を与えるために設けられた高等学校である（風間、2002）。現在も創設当初からの理念は受け継がれており、全日制、定時制高校に進学することができない人々が、登校回数を必要最低限にして、「自学自習」を通じた自分のペースで学べるような教育の機会を提供するという使命を果たしている。

2. 通信制高校の役割の変化

通信制高校が開校された当初は、勤労青少年や主婦、病気療養中の者などに広く高校教育の機会を提供していたが、高等学校（全日制、定時制、通信制）への進学率が上昇するとともに、学校の役割は変化してきている。小、中学校で不登校を経験した生徒が、通信制高校を選

*1 東海大学健康科学研究科保健福祉学専攻（Department of Social Work, School of Health Sciences, Tokai University）

択するようになり、また、高等学校を退学した者の多くが通信制高校で学びなおしの機会を得ている。

文部科学省の調査（2012）によると、高等学校（全日制、定時制）を退学し、高等学校（全日制、定時制、通信制）へ再度入学する生徒、すなわち学びなおしをする高校生6,404人のうち、約9割（90.5%）が定時制、通信制高校で教育の機会を得ている。その中の7割以上の生徒は通信制高校に再入学している。

高校教育の段階で、不登校や高校中退者などを受け入れている全日制的な高等学校は極めて少ない（上野、2009）。森田（2003）によると、不登校については、これまで義務教育を中心に考えられてきたものであり、高等学校では、不登校に属する現象はあっても「不登校」という用語は該当しないものとされ、高等学校の段階になると不登校に対する公的な支援が極めて少なくなってしまうという（尾場、2011）。そうした意味でも、通信制高校は不登校の進路先としても機能しているといえるだろう。

このように、通信制高校に入学する生徒には、不登校をはじめとして多様な問題や課題を抱える生徒や、何らかの障がいや精神病を患う生徒も含まれ、個々の抱えるニーズの多様化が通信制高校の大きな課題となっている（山梨大学、2011）。

その結果、現在の通信制高校は、不登校や中退者が抱える課題を引き受ける期待を担っている。不登校や高校中退などの経験から、他者や学校、社会との関係性を失った生徒たちの自信回復や人間関係の修復、「高校卒業」という具体的な目標達成の場としての役割を担うことが求められている。

しかし、通信制高校は生徒の多様化が指摘されているにもかかわらず、これまでの通信制高校に関する調査研究では、生徒を対象としたものは少なく、生徒の実態を把握するには十分ではない。山梨大学（2011）は、文部科学省の委託事業調査として、公立と私立の通信制高校に在籍する生徒の実態について調査を行っている。しかし、数量的には公立の通信制高校の在校生52名という回収に留まっており、内容的には、十分な生徒の実態把握までには至っていない。そこで、本研究のように生徒を対象に量的な調査を実施することは、生徒の実態と課題を把握することが期待されるだろう。

3. 教員と生徒の関係

通信制高校では、生徒の学習意欲と登校継続を支えるという目標から、教員と生徒の間に密接な関係を形成することが目指されている。これを伊藤（2010）は、教員

と生徒の「密着型」の関係と定義している。この関係には、不登校の経験をもつ生徒の登校継続や学習意欲の持続を支えることができるという効果が指摘されているが、一方で、生徒の卒業後の修学や就業における社会的自立を危うくさせるという問題点も指摘されている。

このような問題も指摘されている中で、なぜあえて、通信制高校では「密着型」の関係が目指されるのだろうか。伊藤（2010）によると、教員の積極的なかわりがなければ、生徒の登校継続は達成されず、「密着型」の関係の形成をめぐって、生徒の登校継続と社会的自立の達成の間でジレンマの関係が生じるという。言い換えると、通信制高校などには、教員が積極的に関わらないと登校を継続させることができない生徒が集まる傾向にある。そのため、生徒の卒業後の自立を考えるよりも前に、現在の登校継続を達成すべき課題として、教員と生徒との間に「密着型」の関係を形成することが目指されているということである。

しかし、これらの先行研究からは、以下の問いが提起される。それは、「密着型」の関係を目指す教員のかかわりを生徒がどのように受け入れているのかという点である。東村（2004）や伊藤（2009）、野田（2012）によれば、通信制高校に入学する者の中には、過去の経験から、学校や教員に対して不信感をもつ状態で入学してくる生徒が少なからずいるという指摘もある。そのような生徒に対し、教員が積極的にかかわることは、生徒の反発を招くことになるのではないのか。

4. リサーチ・クエスション（RQ）

以上の先行研究を踏まえ、本研究は次のリサーチ・クエスションに答えることを目的とした。

（1）通信制高校に通う生徒は、どのような教育的ニーズや社会的、または心理的な課題に直面しているのか（RQ1）。

（2）生徒は、密着型の関係を目指す教員のかかわりをどのように受け入れているのか（RQ2）。

5. 研究の意義

本研究の意義としては、次の2点が挙げられる。①通信制高校の生徒の実態に着目した実証的研究は、生徒の意識と課題並びに学校生活の様子を把握することができる基礎資料となる。②そこで見た生徒の実態から、今日の通信制高校が担っている役割について検討する手掛かりになることが期待される。

Ⅱ. 研究方法

- ①調査目的：通信制高校の生徒の実態と教員のかかわりに関する実証的なデータを収集する。
- ②対象：広域、単位制、独立校、私立を特徴とする通信制高校（以下、X高校）の生徒を対象に、A県の「実施校」とB県の「協力校」のスクーリングに参加している生徒310名を対象とした。
- ③方法：選択式質問紙（自記式）によるアンケート調査。
- ④調査期間：2012年8月20日から9月24日。
- ⑤調査項目：①基本属性に関する内容、②家庭での生活に関する内容、③教員のかかわりに関する内容。
- ⑥分析方法：単純集計及び χ^2 検定を用いた。
- ⑦回収率：77.7%のうち、有効率は67.4%。
- ⑧倫理的配慮：調査票は、個人が特定されないように無記名式とした。調査票は、担当教員を通じて生徒へ配布したため、対象者の自由意志を尊重するため「回答しないことで不利益を生じることはない」ことを明記した文書を配布し、回答後は各自が回収箱へ提出するという方式とした。

Ⅲ. 研究結果

1. 対象者の基本属性

はじめに、対象者の基本属性について記述する（表1）。性別では、男性よりも女性の方がやや多くなっている。年齢では、10代の生徒が全体の約7割を占めており、通信制高校の若年化という昨今の傾向が見て取れる。入学した学年では、2、3年次が全体の約4割を占めている。彼らは、春、秋学期のいずれかに入学した生徒で、通信制高校に入学する前に、高等学校（全日制、定時制、他の通信制）に在籍していた生徒であると考えられる。現在の学年では、2、3年生が全体の約8割を占めており、1年生が少なくなっている。在籍している年数をみると、「1年未満」という通信制高校に入学してそれほど年数が経っていないという生徒が約4割を占めている。世帯構成では、「ひとり親世帯」と、両親でもひとり親でもない「その他」の世帯が半数以上を占めている。「ひとり親世帯」の内訳では、母子世帯が8割以上を占めており、「その他」の世帯では、結婚相手と同居が約4割、ひとり暮らしが約2割を占めていた。

2. 中学3年時の登校状況

15歳から19歳の生徒を対象に、中学3年時の登校状況

表1 対象者の基本属性（%）

項目	カテゴリー	実数	有効%
性別	男性	91	44.0
	女性	116	56.0
年齢	15歳～19歳	145	70.7
	20歳～29歳	35	17.1
	30歳～39歳	19	9.3
	40歳～49歳	6	2.9
入学した学年	1年次	113	54.6
	2年次	70	33.8
	3年次	24	11.6
現在の学年	1年生	26	12.8
	2年生	83	40.9
	3年生	94	46.3
在籍している年数	1年未満	90	44.1
	1年	32	15.7
	2年	56	27.5
	3年	26	12.7
	3年以上	0	0.0
世帯構成	両親世帯	94	45.4
	ひとり親世帯	61	29.5
	その他	52	25.1
ひとり親世帯	父子世帯	7	11.5
	母子世帯	54	88.5

について尋ねたところ、約4割は「週の半分以上休んだ」と回答している。この生徒は、文部科学省が規定している1年間の標準授業時間数から考えると、年間30日以上欠席した不登校に近い状態にあった生徒であると考えられる。

3. 現在の就労状況

現在の就労状況では、「働いている」と回答した生徒が約6割で対象生徒の半数以上を占めていた。就労の形態では、「パート・アルバイト」が44.1%、「正社員・正職員」が15.7%、「自営業」が3.4%であった。修学と就労を両立している生徒が多いようである。

4. 家庭の経済状況

家庭の経済状況では、「ゆとりがある」が44.7%、「苦しい」が46.3%、「わからない」が9%で、ゆとりがあると感じている生徒と苦しさを感じている生徒がそれぞれ約4割ずつで分かれている。

5. 入学の経緯

生徒は、どのような経緯を経て通信制高校へ入学したのだろうか。生徒の入学前の状況とその経緯を把握するため、入学の経緯に関する8つの項目を用いて、いずれ

かの項目1つに回答するよう求めた。その結果、中学校からの入学者や全日制、定時制からの入学者、入学前に働いていた者など、通信制高校へ入学するまでの経緯は多様に富んでいることが分かった（表2）。また、8つの項目に該当しない生徒もあり、そうした生徒には、「その他」の自由記述の形式で回答を求めた。そこには、「中学校卒業後、高校に進学せずにずっと家にいた」、「中学校卒業後、2年間引きこもり後、通信制高校へ入学した」、「全日制高校を中退して、定時制に行って編入して通信にいった」、「フリースクールに在籍し、高卒認定を取得後、Z大学に入学。2年の春に自主退学し、それと同時にX高校に入学」などの記述がみられた。通信制高校へ入学するまでに、何もしていないという空白の期間を過ごしてきた者や、中学校を卒業後、1校もしくは2校以上の高等学校（全日制、定時制及び他の通信制高校）を経験し、通信制高校へと入学した者もいる。いずれも様々な経験をしている生徒で、入学経緯の多様性が通信制高校の生徒の特徴と思われる。

6. 教員のかかわり

教員のかかわりに関する8項目のうち、「そう思う」と回答した割合が最も高い項目は、「先生たちはよく声をかけてくれる」の65.2%で、「ややそう思う」を加えると、96.5%までに達していた。次いで、「そう思う」と回答したのが多いのは、「先生たちは、生徒1人ひとりに配慮した指導をしている」であった。その他の項目、すなわち「先生たちは、あなたたちの意見や希望を聞いてくれる」、「先生たちは、あなたの悩みや相談に親身になって応じてくれる」、「あなたが迷っているとき、困っているときにアドバイスをしてくれる」も、「ややそう思う」を加えると、いずれも90%以上の生徒が「そう思う」と回答しており、声掛けやアドバイスなど支持的な教員のかかわりについては肯定的に評価している生徒が多いといえる。

他方で、「先生たちとは、よく世間話をする」、「先生たちは、授業態度やマナーについて、厳しく指導している」、「先生たちは、人間関係を築くため、正しい言葉づかいやあいさつができるように指導している」の項目では、約2割が「思わない」と回答している。また、教員のかかわりについての自由記述の中では、「私は、先生の方と話したり、気が合ったり、どちらかというと元々そうですが、A高校に来てからは、同い年くらいの友達の方が話しやすかったりがあります。先生の方が、生徒に対して、気をつかっているような印象が全てではないですがあります」や、「先生方の注意の仕方が甘い」と

表2 入学の経緯（%）

カテゴリー	実数	有効%
(1) 中学校を卒業後、すぐに通信制高校へ入学した	36	17.7
(2) 中学校を卒業後、働いていた。後に通信制高校に入学した	15	7.4
(3) 全日制高校に進学した後、通信制高校へ転校（転入学）した	47	23.2
(4) 全日制高校に進学した後、通信制高校へ編入学した	37	18.2
(5) 全日制高校に進学した後、中退し働いていた。後に通信制高校に入学した	45	22.2
(6) 定時制高校に進学した後、通信制高校へ転校（転入）した	3	1.5
(7) 定時制高校に進学した後、通信制高校へ編入学した	1	0.5
(8) 定時制高校に進学した後、中退し働いていた。後に通信制高校に入学した	7	3.4
(9) その他	12	5.9

* 転入学とは、在籍している学校から、他の学校に転校（転入）すること。

* 編入学とは、在籍している学校を退学し、他の学校に、再度、入学（編入）すること。

指摘する者もあり、あいさつや授業態度などの指導が十分ではないと感じている生徒がいたことをここで指摘しておく。

7. 対象者の属性と入学の経緯との関連

対象者の属性と入学の経緯との間に関連はあるのだろうか。ここでは、多面的に生徒のニーズを把握するため、入学の経緯で得られた回答をAからEまでの5つのグループに大別し、対象者の属性（性別、年齢、入学した学年、中学3年時の登校状況、家庭の経済状況、就労状況、世帯構成）とで χ^2 検定を行った。Aグループは、中途退学の経験の有無を示すものとして、中退群と非中退群から構成される（表3-1）。Bグループは、通信制高校へ入学する前の過去の在籍状況を示すものとして、中学校に在籍していた、全日制高校に在籍していた、その他（定時制など）に在籍していた生徒の3つより構成される（表3-2）。Cグループは、入学の形態を示すものとして、中学校から入学した（表では「新入学」と表記）と、高等学校（全日制、定時制）からの転入学と編入学の3つより構成される（表3-3）。Dグループは、入学前の就労状況を示すものとして、中学校を卒業後、もしくは高等学校（全日制、定時制）を退学した後、働いていた生徒と働いていない生徒より構成される（表

表3-1 対象者の属性と入学の経緯との関連 Aグループ (χ^2 検定)

項目		実数	中退群	非中退群	χ^2 検定
性別	男性	88	41 (45.6)	47 (41.6)	n.s.
	女性	115	49 (54.4)	66 (58.4)	
年齢	15～19歳	143	48 (53.3)	95 (84.8)	$\chi^2=23.929$ ***df=1
	20歳以上	59	42 (46.7)	17 (15.2)	
入学した学年	1年次	113	38 (42.2)	75 (66.4)	$\chi^2=13.578$ *** df=2
	2年次	67	36 (40.0)	31 (27.4)	
	3年次	23	16 (17.8)	7 (6.2)	
中学3年時の 登校状況	ほぼ毎日通っていた	81	37 (78.7)	44 (47.3)	$\chi^2=12.634$ ***df=1
	週の半分以上休んだ	59	10 (21.3)	49 (52.7)	
家庭の 経済状況	ゆとりがある	88	36 (44.4)	52 (52.5)	n.s.
	苦しい	92	45 (55.6)	47 (47.5)	
現在の 就労状況	働いている	126	68 (75.6)	58 (52.3)	$\chi^2=11.539$ ***df=1
	働いていない	75	22 (24.4)	53 (47.7)	
世帯構成	両親世帯	93	34 (38.2)	59 (52.2)	$\chi^2=10.806$ ** df=2
	ひとり親世帯	59	23 (25.8)	36 (31.9)	
	その他	50	32 (36.0)	18 (15.9)	

n.s. : 非有意 * : $p < 0.05$, ** : $p < 0.01$, *** : $p < 0.001$ 表3-2 対象者の属性と入学の経緯との関連 Bグループ (χ^2 検定)

項目		実数	中学校	全日制高校	その他	χ^2 検定
性別	男性	88	16 (44.4)	55 (42.6)	17 (44.7)	n.s.
	女性	115	20 (55.6)	74 (57.4)	21 (55.3)	
年齢	15～19歳	143	35 (100.0)	93 (72.1)	15 (39.5)	n.s.
	20歳以上	59	0 (0.0)	36 (27.9)	23 (60.5)	
入学した学年	1年次	113	36 (100.0)	51 (39.5)	26 (68.4)	n.s.
	2年次	67	0 (0.0)	59 (45.7)	8 (21.1)	
	3年次	23	0 (0.0)	19 (14.7)	4 (10.5)	
中学3年時の 登校状況	ほぼ毎日通っていた	81	9 (25.7)	66 (73.3)	6 (40.0)	$\chi^2=25.633$ *** df=2
	週の半分以上休んだ	59	26 (74.3)	24 (26.7)	9 (60.0)	
家庭の 経済状況	ゆとりがある	88	15 (51.7)	56 (48.3)	17 (48.6)	n.s.
	苦しい	92	14 (48.3)	60 (51.7)	18 (51.4)	
現在の 就労状況	働いている	126	13 (38.2)	86 (66.7)	27 (71.1)	$\chi^2=10.701$ * df=2
	働いていない	75	21 (61.8)	43 (33.3)	11 (28.9)	
世帯構成	両親世帯	93	20 (55.6)	60 (46.9)	13 (34.2)	n.s.
	ひとり親世帯	59	15 (41.7)	39 (30.5)	5 (13.2)	
	その他	50	1 (2.8)	29 (22.7)	20 (52.6)	

n.s. : 非有意 * : $p < 0.05$, ** : $p < 0.01$, *** : $p < 0.001$

3-4)。Eグループは、入学直前の状態を示すものとして、中学校に在学していた生徒と高等学校（全日制、定時制）に在学していた生徒、中学校を卒業後、あるいは高等学校（全日制、定時制）を退学した後、働いていた生徒の3つより構成される（表3-5）。

χ^2 検定の結果、入学の経緯別にみる生徒の特徴を要約すると、中学校からの入学者には、現在は働いておら

ず、中学時代において不登校であった者が多い。全日制、定時制高校からの入学者には、不登校の経験者は少なく、現在は働いている者が多い。入学前に働いていた者の多くは、20歳以上で、両親でもひとり親世帯でもない「その他」の世帯に該当し、家庭の経済状況に苦しさを感じ、現在、働いているという者が多いという結果になった。

表3-3 対象者の属性と入学の経緯との関連 Cグループ (χ^2 検定)

項目		実数	新入学	転入学	編入学	χ^2 検定
性別	男性	78	16 (44.4)	21 (42.0)	41 (45.6)	n.s.
	女性	98	20 (55.6)	29 (58.0)	49 (54.4)	
年齢	15～19歳	133	35 (100.0)	50 (100.0)	48 (53.3)	n.s.
	20歳以上	42	0 (0.0)	0 (0.00)	42 (46.7)	
入学した学年	1年次	91	36 (100.0)	17 (34.0)	38 (42.2)	n.s.
	2年次	64	0 (0.00)	28 (56.0)	36 (40.0)	
	3年次	21	0 (0.00)	5 (10.0)	16 (17.8)	
中学3年時の 登校状況	ほぼ毎日通っていた	78	9 (25.7)	32 (66.7)	37 (78.7)	$\chi^2=24.897^{***}$ df=2
	週の半分以上休んだ	52	26 (74.3)	16 (33.3)	10 (21.3)	
家庭の 経済状況	ゆとりがある	74	15 (51.7)	23 (53.5)	36 (44.4)	n.s.
	苦しい	79	14 (48.3)	20 (46.5)	45 (55.6)	
現在の 就労状況	働いている	106	13 (38.2)	25 (50.0)	68 (75.6)	$\chi^2=17.951^{***}$ df=2
	働いていない	68	21 (61.8)	25 (50.0)	22 (24.4)	
世帯構成	両親世帯	83	20 (55.6)	29 (58.0)	34 (38.2)	n.s.
	ひとり親世帯	55	15 (41.7)	17 (34.0)	23 (25.8)	
	その他	37	1 (2.8)	4 (8.0)	32 (36.0)	

n.s. : 非有意 * : $p < 0.05$ 、** : $p < 0.01$ 、*** : $p < 0.001$ 表3-4 対象者の属性と入学の経緯との関連 Dグループ (χ^2 検定)

項目		実数	働いていた	働いていない	χ^2 検定
性別	男性	84	25 (37.3)	59 (47.6)	n.s.
	女性	107	42 (62.7)	65 (52.4)	
年齢	15～19歳	136	16 (23.9)	120 (97.6)	n.s.
	20歳以上	54	51 (76.1)	3 (2.4)	
入学した学年	1年次	106	40 (59.7)	66 (53.2)	n.s.
	2年次	64	20 (29.9)	44 (35.5)	
	3年次	21	7 (10.4)	14 (11.3)	
中学3年時の 登校状況	ほぼ毎日通っていた	79	10 (62.5)	69 (59.0)	n.s.
	週の半分以上休んだ	54	6 (37.5)	48 (41.0)	
家庭の 経済状況	ゆとりがある	84	28 (43.1)	56 (54.4)	$\chi^2=2.033\Delta$ df=1
	苦しい	84	37 (56.9)	47 (45.6)	
現在の 就労状況	働いている	118	54 (80.6)	64 (52.5)	$\chi^2=14.600^{***}$ df=1
	働いていない	71	13 (19.4)	58 (47.5)	
世帯構成	両親世帯	88	18 (26.9)	70 (56.9)	$\chi^2=59.608^{***}$ df=2
	ひとり親世帯	56	11 (16.4)	45 (36.6)	
	その他	46	38 (56.7)	8 (6.5)	

n.s. : 非有意 * : $p < 0.05$ 、** : $p < 0.01$ 、*** : $p < 0.001$

記述する。

IV. 考察

1) リサーチ・クエスチョン (RQ1) についての考察

生徒の直面している課題については、具体的な課題を明らかにするまでには至らなかったが、研究の過程で想定された生徒の課題と関連すると思われる要因について

通信制高校の入学者は、不登校、高校中退、就労経験の有無など様々であった。具体的には、中学校からの入学者は、不登校の経験者が多く、働いている者は少ない。それとは反対に、高等学校（全日制、定時制）からの入学者では、不登校の経験者は少なく、現在、働いている者や中途退学を経験している者が多い。入学前に働

表3-5 対象者の属性と入学の経緯との関連 Eグループ (χ^2 検定)

項目		実数	中学校に 在学していた	高等学校に 在学していた	入学前に 働いていた	χ^2 検定
性別	男性	84	16 (44.4)	43 (48.9)	25 (37.3)	n.s.
	女性	107	20 (55.6)	45 (51.1)	42 (62.7)	
年齢	15～19 歳	136	35 (100.0)	85 (96.6)	16 (23.9)	n.s.
	20 歳以上	54	0 (0.0)	3 (3.4)	51 (76.1)	
入学した学年	1 年次	106	36 (100.0)	30 (34.1)	40 (59.7)	n.s.
	2 年次	64	0 (0.0)	44 (50.0)	20 (29.0)	
	3 年次	21	0 (0.0)	14 (15.9)	7 (10.4)	
中学3年時の 登校状況	ほぼ毎日通っていた	79	9 (25.7)	60 (73.2)	10 (62.5)	$\chi^2=22.980^{***}$ df=2
	週の半分以上休んだ	54	26 (74.3)	22 (26.8)	6 (37.5)	
家庭の 経済状況	ゆとりがある	84	15 (51.7)	41 (55.4)	28 (43.1)	n.s.
	苦しい	84	14 (48.3)	33 (44.6)	37 (56.9)	
現在の 就労状況	働いている	118	13 (38.2)	51 (58.0)	54 (80.6)	$\chi^2=18.666^{***}$ df=2
	働いていない	71	21 (61.8)	37 (42.0)	13 (19.4)	
世帯構成	両親世帯	88	20 (55.6)	50 (57.5)	18 (26.9)	n.s.
	ひとり親世帯	56	15 (41.7)	30 (34.5)	11 (16.4)	
	その他	46	1 (2.8)	7 (8.0)	38 (56.7)	

n.s. : 非有意 * : $p < 0.05$, ** : $p < 0.01$, *** : $p < 0.001$

いていた者には、家庭の経済状況に苦しさを感じている者、働いている者が多いなどである。このように、入学の経緯別にみるとそれぞれの生徒が有する特性には違いが見受けられる。

これらを踏まえると、生徒の直面している課題は、入学するまでの経緯と深い関係にあることが示されたといえよう。通信制高校に入る前の学歴や職歴などそれまでの経験は、入学生の人生が凝縮されている。入学前の不登校や高校中退、就労の経験など、それぞれが異なる体験をしており、彼らが直面している課題も異なるのではないかと考えられる。実際、中学校からの入学者の多くは、過去の長期欠席や不登校の経験から、通信制高校で行われる学習を理解できずにいること（土岐、2012）や高等学校からの入学者の多くは、前在籍校でのいじめをはじめとする人間関係のもつれが通信制高校への進路変更の背景にある（上野、2009）という指摘もある。こうした主張は、生徒の直面している課題と入学の経緯の関連性を示唆するものである。

そのうえ、高等学校からの入学者については、その多くが、前在籍校から1年から2年余りの間で通信制高校へと進路を変更していることには注目する必要があるだろう。彼らの中には、先に述べたように、1校若しくは2校以上の学校を経験している者もあり、なぜ彼らは他の高等学校に再度、入学した後、再び辞めてしまったのか。どのようにして、現在の通信制高校に辿り着いたのか。そこにはさまざまな苦悩や葛藤があったと思われる。

様々なタイプの生徒が集まる傾向にある通信制高校の生徒の抱える課題を把握するためには、現在の生徒の状況だけに視点を当てるだけではなく、通信制高校へ入る前、すなわち過去の状況やそれまでの体験等にもまなごしを向け、そこにはどのような社会的、教育的な課題が存在するのかを探ることも必要ではないだろうか。今後、多様な背景を持つ生徒1人ひとりの「個」に焦点を当て、入学の経緯の背景に隠された様々な課題を生徒の語りから質的に読み解く研究が必要となるだろう。

2) リサーチ・クエスチョン (RQ2) についての考察

通信制高校は、不登校や高校中退、学校不適応、学業不振などの生徒が集まる傾向にある。このような特性をもつ生徒の登校継続と学習意欲を支えるために、教員は生徒に積極的にかかわり、生徒との間に親密な関係（「密着型」の関係）を形成する働きかけを行う。しかし、このような関係には、生徒の卒業後の社会的自立を危うくさせるという問題点も指摘されている。

本研究では、通信制高校に通う生徒を対象に、教員のかかわりについて調査した。その結果、教員のかかわりでは声掛けやアドバイスなど支持的なかかわりについては評価する生徒が多い反面、あいさつや授業態度などの指導が十分ではないと感じている生徒もいることが示された。

教員と生徒の関係を考える上で、通信制高校の特質的な条件に着目する必要がある。制度上、通信制高校は全

日制高校とは異なり、毎日の通学ではないため、生徒と関わる機会は自然に少なくなる。

このような条件のもと、多様な背景をもつ生徒に対し、教員は限られた時間の中で、生徒と良い関係を築き、不登校や高校中退などの経験から生じるであろう学校や教員に対する不安の解消や挫折体験からの自信回復に加えて、高校卒業に必要な学力、自立していくための態度等を養うことが求められる。しかし、これらの課題を1年若しくは2年、3年と長期に渡り達成していくことは容易なことではないだろう。それは、調査の結果でみたように、生徒の入学前の状況によって、入学する学年と在籍する年数が1人ひとり違うためである。さらに通信制高校には、様々なタイプの生徒がおり、全日制高校のような一律な集団ではないため、特に支持的なかかわりを必要とする生徒もいれば、またその反対に、教育の場で求められる指導を必要とする生徒もいるだろう。様々な背景をもつ生徒の登校継続や学習意欲を支えていくためには「密着型」の関係は必要であろうと思われるが、個々の生徒の状況に合わせたより個別的なかかわりが重要であると考ええる。

しかし、このような指導法は、今日の通信制高校の使命である「学びなおし」に合わないところもあるのではないかという疑問もある。東村（2004）が指摘するように、教員と生徒の関係は、ただ楽しければよいというものではないだろう。通信制高校は、生徒の社会性や学習態度を育てる教員のかかわりについて検討することが今後の課題となるだろう。

V. おわりに

本研究より、通信制高校の役割としては、次のようにまとめることができる。第一に、通信制高校は、今日の高校教育を支えるセーフティーネットとして機能している。近年では、高等学校への進学率は97%までに達し、誰もが高校進学及び高校受験を体験するようになった。しかし、それは同時に多くの高校中退や不登校を生み出す結果となった。こうした中、不登校や高校中退など様々な経験をしてきた生徒たちを積極的に受け入れている高等学校は少なく、全日制高校の補足的な役割を通信制高校が担っているといっても過言ではない。

第二に、通信制高校は、従来からの使命を背負った社会的なセーフティーネットとして機能している。通信制高校への入学者には、不登校、高校中退に限らず、就労経験の有無など様々な背景があり、年齢層も幅広い。通信制高校は、学校教育法に規定された高等学校ではあ

るが、必ずしも高校生の段階の年齢に限定されることなく、いつでも、誰でも、どんな条件、環境下にあっても高校教育を学べるという社会的な側面を担っているといえよう。

今後、より多様な背景を持つ生徒たちが通信制高校に入学して来ることが予測される。その中には、不登校や高校中退はもとより、障がいなど様々な背景をもつ生徒も含まれるだろう。生徒の個別性、多様性に対応していくためには、教育的なアプローチだけではなく、ソーシャルワークを視野に入れた個別的なかかわりや個別支援、多職種連携のチームアプローチも必要になるだろう。

本研究から得た知見が今後、通信制高校の進展につながり、少しでも生徒の実態把握並びに生徒への指導策定に貢献できれば幸いである。

参考文献

- 1 伊藤秀樹（2009）：不登校経験者への登校支援とその課題：チャレンジスクール、高等専修学校の事例から、教育社会学研究、(84)、pp.207-226.
- 2 伊藤秀樹（2010）：高等専修学校における密着型教師—生徒関係—生徒の登校継続と社会的自立に向けたストラテジー、東京大学大学院教育学研究科紀要、(50)、pp.13-21.
- 3 稲垣卓司、和気玲（2007）：不登校生徒の通信制高校適応状態の検討、児童青年精神医学その近接領域、日本児童青年精神医学学会、児精医誌（48）、pp.155-160.
- 4 上野昌之（2009）：通信制高校における生徒指導に関する考察、早稲田大学大学院教育学研究科紀要：別冊、16（2）、pp.25-36.
- 5 尾場友和（2011）：オルタナティブな進路としての通信制高校：入学者の属性と意識、広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 教育人間科学関連領域（60）、pp.55-62.
- 6 風間効（2002）：高校教育はどう変わるべきか、蝸牛新社、p.8、p.13、pp.167-172.
- 7 杉田郁代（2009）：通信制高校における学校教育相談の研究（1）、環太平洋大学研究紀要（収録刊行物）、pp.103-108.
- 8 全国高等学校定時制通信制教育振興会（2012）：平成23年度高等学校定時制課程・通信制課程の有り方に関する調査研究、財団法人.
- 9 東村知子（2004）：サポート校における不登校生・高校中退者への支援—その意義と矛盾、実験社会心理学研究、43（2）、pp.140-154.
- 10 土岐玲奈・保坂亨（2012）：学習にブランクのある生徒に対する学習支援の現状と課題：通信制高校における調査から、千葉大学教育学部研究紀要、(60)、pp.191-195.
- 11 野田将晴（2012）：教育者は聖職者である、高木書房、p.18、p.56、p.122、p.129.
- 12 森田洋司（2003）：不登校—その後 不登校経験者が語

- る真理と行動の軌跡、教育開発研究所、pp.11-48.
- 13 文部科学省（2010）：高等学校学習指導要領解説総則編
[単行本]、東山書房、p.7、p.15、p.16、p.51、p.82、p.86、
pp.88-91.
- 14 文部科学省（2012）：平成23年度児童生徒の問題行動等
生徒指導上の諸問題に関する調査.
- 15 山梨大学（2011）：通信制高等学校の第三者評価制度構
築に関する調査研究—最終報告書—、大学教育研究開発
センター、pp.4-18、pp.129-144、pp.146-156.

Abstract

A correspondence education high school system was established to meet the needs of working students. In recent years, however, the schools have accepted students with various backgrounds including school refusal and high school dropout, which has resulted in changes of the students' needs and the teachers' roles.

The purpose of this study was to find and classify difficulties students face and the students' relationships with their teachers.

The results showed the following; difficulties of the students were highly related to their past experiences before they entered the school. Many of the students who entered the school right after a middle school experienced school refusal. Many of the students who worked due to economic difficulties before entering the school continue working after enrollment. Many students value teachers' supportive attitudes such as friendly greeting and advices, but they also felt teachers should give more instructive orientations regarding social behaviors and study attitudes. While the teachers' supportive relationships could encourage students to attend classes and to keep motivations for learning, they should also focus on helping students acquire social skills and improve learning attitudes in the correspondence education environment.

In the near future, students with various backgrounds will continue to attend correspondence education high schools. To meet their needs, an individualized educational approach with social work skills and a multi-disciplinary team approach will be needed.

Key words: correspondence education high school, school refusal, teachers' role

